シュヴァルツェスマーケン・えくすとら♪
最終話「俺が好きなのは・・・！！」

1. 幸せの日々

『お帰りなさい、お兄ちゃん♪』
『ただいまリィズ。今帰ったよ。』

とても穏やかな笑顔で、仕事帰りのテオドールを優しく出迎え、首に両腕を回してテオドールと唇を重ねるリィズ。
長いキスを終えた後、ふうっ、と大きな溜め息をつきながら、テオドールはスーツを脱いでリィズに手渡した。
やはり我が家が一番落ち着く。仕事で疲れ切った心と身体を、リィズの笑顔と優しさが癒してくれる。
今日はローテンブルクへの系列店舗の出店準備や、アルバイトの学生たちへの教育などに追われて本当に大変だったのだが、それでも何とか無事にやり遂げる事が出来た。

『もうすぐ晩御飯出来るから、先にアイリスと一緒にお風呂に入ってきたら？アイリスもさっき仕事から帰ってきたばかりだから。』
『ああ、今日の風呂の当番はアイリスだったか。』
『その代わり、今日の夜にお兄ちゃんと愛し合うのは私なんだからねっ。』

ちょっと妬けちゃうけど、それでもお兄ちゃんの正妻はこの私なんだから。
リィズの意地悪な笑顔が、テオドールに無言でそう告げていた。
テオドールもリィズの心情を察し、とても穏やかな笑顔でリィズの頭を撫でてあげる。
テオドールの大きな右手の感触が、何だかリィズにはとても心地良かった。

『お帰り、テオドール。今日も仕事でとても疲れただろう。』
『ただいま、アイリス。』
『さあ、椅子に座って力を抜くがいい。私がお前の身体を洗ってあげよう。』

浴室で互いに一糸纏わぬ姿になり、椅子に座ったテオドールの身体を、ボディーソープで優しく洗うアイリスディーナ。
そして全身が泡だらけになったテオドールの身体を、アイリスディーナが背後からぎゅっと抱き締めた。
そこからさらに全身を使って、テオドールの全身を舐め回すかのように、テオドールの身体を癒していく。
そのアイリスディーナの身体の柔らかい感触が、とてもくすぐったくて気持ちいい。

『相当疲れが溜まってるようだな。全く兄上もテオドールの事をこき使い過ぎだろうに。』
『それだけ俺が部長から信頼されてるって事だよ。』
『今度の日曜日は休みが取れそうなのだろう？また皆でどこかに出かけようか。それとも家でのんびり過ごすか？』
『そうだな、久しぶりに家でゆっくりしたいよ。』

『ははは、了解だ。』

互いに身体を洗った後、一緒に湯船に浸かりながら、テオドールとアイリスディーナは他愛ない会話をする。
ファミレスの運営という仕事をしている関係上、テオドールはどうしても休みが不定期になってしまっていた。
その分しっかりと休みが取れるのはいいのだが、専業主婦のリィズ以外は全員が土日が休みの仕事をしているので、どうしても皆との休みが合わない事が多かったりする。
それでもテオドールは、今の仕事にとてもやりがいを感じていた。

『・・・本当なら、このままお前と愛し合いたい所なのだが・・・今日はリィズが当番だからな。これだけで勘弁しておいてやる。』

とても意地悪な笑顔で、そっ・・・と、テオドールに唇を重ねるアイリスディーナ。
そんなアイリスディーナの身体を、テオドールはぎゅっと抱き締めた。
アイリスディーナの豊満な胸が、テオドールの胸に押し付けられて潰れてしまう。

『・・・んっ・・・ちゅっ・・・ふふふ・・・またキスが上手くなったな・・・テオドール・・・。』
『そりゃあ、毎日毎日皆にキスされまくってるからな、俺は・・・。』
『さあ、そろそろ上がろう。お前のキスが気持ち良過ぎて、のぼせてしまいそうだ。ふふふ・・・。』

風呂から上がりパジャマに着替えたテオドールの身体を、仕事を終えて帰宅したばかりのカティアとアネットが、左右からぎゅっと抱き締めた。

『ただいまです、テオドールさん。』
『今日も疲れた～。テオドール～、私たちをぎゅっと抱き締めて～。』
『お帰り、カティア。アネット。』

左右から抱き着いてきたカティアとアネットに、順番に優しく唇を重ねるテオドール。
そんな3人の光景を、アイリスディーナがとても穏やかな笑顔で見つめている。

『2人共お帰りなさい。とても疲れたでしょ？もうすぐ晩御飯が出来るから、もうちょっと待っててね。』
『リィズさん。キルケさんとファムお姉ちゃんとベアトリクスさんは、まだ帰ってきてないんですか？』
『キルケとファムお姉ちゃんは、もうすぐ帰るってLINEで連絡があったよ。ベアトリクスさんは、今日はユルゲンさんの所に行くって。』
『ベアトリクスさんも大変よね～。ユルゲンさんを夫にしてテオドールを愛人にするとか、私にはとても真似出来ないわ。』

どちらか片方に絞ればいいのにとアネットは苦笑いするが、まぁアネットたちもこうしてテオドールの側室になっているので、そんなに偉そうな事を言えた義理ではなかったりする。
この統一ドイツで一夫多妻制が認められてからというもの、テオドールはリィズを正妻として、アイリスディーナたちを側室にするという形で、賑やかな同居生活を送るようになっていた。

リィズが専業主婦として皆の生活を支え、他の者が働いて収入を得る。
常識的に考えれば歪んでいるとしか言いようが無い光景であり、そんなテオドールたちの事を批判する者たちも未だに多いのだが、これもまたテオドールたちにとって1つの幸せの形なのだろう。

まあそんなテオドールの事を、物凄い妬みと恨みの形相で睨みつける、女子にモテない男共もいたりするのだが・・・。

『ただいま～。ふぅ、今日もとても疲れたわ～。』
『もう、キルケちゃんったら、本当にはしたないんだから。うふふ。』
『お帰り。キルケ、ファム姉。』

自分に抱き着くキルケとファムに、テオドールはそっ・・・と優しく唇を重ねた。
キルケとファムは、とても幸せそうな表情でテオドールを見つめている。
自分と同じ男の人を愛する彼女たちの幸せそうな姿に、正妻のリィズは嫉妬するどころか、逆に幸せさえも感じていた。

『これで全員揃ったわね。たった今晩御飯が出来た所だから、丁度良かったわ。』
『リィズさん、私もうお腹ペコペコです～。』
『もう、カティアちゃんったら本当にだらしないんだから。』

もう高校を卒業して社会人になったというのに、未だに子供っぽさが抜けないカティアの姿を見て、苦笑いを浮かべるリィズ。
何だかリィズは手がかかる妹が出来たみたいで、幸せな気分になったのだった。

『おっ、今日は青椒肉絲なのか。』
『そうよ。アスクマンが得意な青椒肉絲。だけど私だってあいつより美味しく作れるんだから。』
『いっただきまーす。』
『・・・どう？お兄ちゃん。あいつの青椒肉絲とどっちが美味しい？』
『そんなの、お前の作った青椒肉絲の方が美味いに決まってるだろ。』
『嬉しい！！お兄ちゃん大好き！！』
『俺もお前の事が好きだぜ、リィズ・・・いや、お前だけじゃない。ここにいる皆も、今日は部長の所に行ってるベアトリクスも、全員な。』

テオドールの言葉に、リィズたちは満面の笑顔で応えたのだった。
そう、これこそがテオドールたちが選んだ道。テオドールたちが掴み取った幸せの形。
周りからどう思われようが関係ない。これが自分たちが選んだ道なのだから、胸を張って歩いていこう。
とても幸せそうに夕食を食べるリィズたちの姿を見て、テオドールは改めてその決意を胸に秘めたのだった・・・。

「・・・う～ん・・・リィズ・・・アイリス・・・カティア・・・アネット・・・ファム・・・キルケ・・・ベアトリクス・・・」
「「「「「「「・・・・・。」」」」」」」」
「みぃ～んな、大好きだぁ・・・あは、あはははは・・・。」
「「「「「「「・・・・・にやそ。」」」」」」」」

温かい布団の温もりに包まれながら、とんでもない夢を観ているテオドールの寝顔を、名前を呼ばれた7人が物凄い笑顔で見つめていたのだった・・・。

2. 決着を付ける為に

あの遊園地での凄まじい出来事の後の、翌日の月曜日の午前6時。
新聞配達のアルバイトに精を出す学生たち、犬を散歩に出す人たち、ジョギングをする人たち、こんな朝早くから会社に出勤する人たち・・・清々しい快晴の早朝の最中、暖かな太陽の光が彼らを優しく包み込んでいた。
そんな中でもテオドールは、普段はまだ寝ている時間帯だからというのもあるが、未だに安らかな寝顔で寝息を立て続けている。
1階の食卓ではリィズの母親が、とても穏やかな表情で朝食を作っていたのだが。

（テオドール君ったら、寝顔も本当に可愛らしいのね・・・。うふふ。）

キルケがとても穏やかな笑顔で、テオドールの頬を右手人差し指でツンツンしていた・・・。

（ちょっとキルケ、どさくさに紛れて何お兄ちゃんの唇を撫で回してるのよ！？）
（わざとじゃないわよ～。手元が狂っただけよ～。）
（キルケさんだけずるいです～。私もテオドールさんの頬にツンツンしたいです～。）
（あらあら、あまり騒ぐとテオドール君が起きちゃうわよ？）
（いや、て言うか、むしろ起こさないとまずいんじゃないですか？ファム先輩。）
（ああん、私にはユルゲンがいるというのに、テオドールの寝顔にどんどん引きこまれていってしまうわ！！これが恋愛原子核の力だというの！？）

なんかテオドールは、まどろみの夢の中でリィズたちの声を聞いたような気がした。

（いいかお前たち、事前に示し合わせた通り、告白の時間は1人1分までだ。そしてキスは1人3秒まで、舌を入れるのは禁止、さらにキス以上の性的行為も一切禁止だからな。ルールを破った者は即刻退場処分とする。）

レッドカードをちらつかせるアイリスディーナに、リィズたちは仕方が無いといった表情で頷く。
テオドールへの愛の告白は、あくまでも全員で平等に公平に。
そして全員の告白を終えた後に、テオドールに誰が好きなのかをはっきりして貰う。
その為にこんな朝早くから、こうして全員揃って集まってきたのだから。

（仕方が無いわね。でもまあいいわ。お兄ちゃんの愛を掴むのは、この私以外に有り得ないんだから。）
（それじゃあ皆さん、そろそろテオドールさんを起こしてあげましょうか。）
（そうだな。この後の皆の告白タイムの事を考えると、そろそろ起こしてやらないと本当に遅刻してしまいそうだ。）

「よーし、今日もリィズたちの為に・・・仕事を頑張るぞぉ・・・」

（よーし、私の合図の後に、全員で一斉にテオドールを叩き起こすぞ。いいな？）

アイリスディーナたちが一斉に眠っているテオドールの布団を掴み・・・そして・・・

「カウント開始・・・5・・・4・・・3・・・2・・・ひと・・・今！！」
「「「「「「いい加減、起きろーーーーーーーーーーーーーーーーー！！」」」」」」
「どあああああああああああああああああああああああああああ！？」

いきなり布団をひっぺ返され、一斉に大声で起こされたテオドールは、まどろみの夢から強制的に目覚めさせられたのだった。
目覚めたテオドールの目の前にいたのは、毎朝自分を起こしに来るリィズやアイリスディーナだけではない・・・カティア、アネット、ファム、キルケ、ベアトリクスの姿も。
一体全体何がどうなっているのか、全然意味が分からないテオドール。

「・・・は！？・・・あ！？・・・ちょ、えええええええええええええええええ！？」
「やあ、おはようテオドール。今日はお前に添い寝が出来なくて本当に残念だ。」
「何で！？この部屋に！？お前らが！？いるの（泣）！？」

6畳ちょっとの広さのテオドールの部屋に、一斉に押しかけてきた7人・・・ぎゅうぎゅう詰めとまでは言わないが、何だかテオドールは自分を見つめるアイリスディーナたちに、押しつぶされてしまいそうな気分になってしまっていた。

「昨日の夜、お前とリィズが帰宅した後に、皆でLINEで話し合ったのだがな・・・このままズルズルと今の状態を続けるのは良くないから、いい加減お前にはっきりと決めて貰う為に、こうして学校に行く前に皆で集まったという訳だ。」
「決めて貰うって何を（汗）！？」
「お前が私たちの中の誰を、本物の恋人にするのかを・・・だ。」

とても真っ直ぐな瞳で、テオドールをじっ・・・と見据えるアイリスディーナ。
アイリスディーナがテオドールに見せたスマホの画面には、リィズたちとのLINEのやり取りがびっしりと埋まった画像が。

朝5時30分までにテオドールの部屋に集合。
朝6時までに全員で最終的な打ち合わせ。
告白は1人1分まで、キスは1人3秒まで、舌を入れるのは禁止、キス以上の行為も禁止。
ルールを破った者は即刻退場処分とする。
誰がテオドールの恋人になっても恨みっこ無し。

ところでリィズ。テオドールの部屋には、やっぱりエロ本とかあったりするのかな？
この間ベッドの下に、巨乳のお姉さんの写真が沢山載ってる本があったよ。アネット。
そうかテオドールは巨乳が好きなのか。やはり私こそが奴の未来の妻として相応しいな。
くっ・・・胸の大きさが女子力の決定的な差では無いという事を、明日テオドールさんに教えてあげます！！

そう言えばこの間、テオドールのパソコンをハッキングしたんだけど。
お前は何をやっているのだベアトリクス！？
動画フォルダの中にレズ動画が大量に落とされていたわ。
何ぃ！？テオドールめ、まさかそんな趣味があったとは・・・！！
ならば男も女も両方いける私こそが、テオドールの未来の妻として相応しいわね。
だからお前には兄上がいるだろうが！！と言うか男も女も両方いけるって何だ！？

「何で俺のパソコンがハッキングされてるんだよ！？ベアトリクス先輩怖えよ（泣）！！」

もうプライパシーも何もあった物ではなかった・・・。
恐怖におののくテオドールの表情を、ベアトリクスが物凄い笑顔でドヤ顔で見つめている。

「まあ途中でアスクマンに私のLINEのアカウントをハッキングされていたと、ベアトリクスに教えて貰ったのだがな・・・奴なら今あそこに縛り付けてあるから安心しろ。」
「ぬおおおおおおおおお、私にもテオドール君に告白させろおおおおおおおおお！！キスさせろおおおおおおおおおおおおおおおお（泣）！！」

玄関の前ではアスクマンが、何故か半裸で亀甲縛りされた状態で放置されていた・・・。
そんなアスクマンにハッハッハッハッ言いながら鼻を近付ける犬を、慌てて飼い主が近付いたらいけませんとか叫びながら、リードで引っ張って引き離している。

「・・・とまあ、見ての通りだ。突然の事で申し訳無いが、今日、今この場で、私たちはお前に愛の告白をする。」
「ア、アイリス・・・。」
「だからお前にはっきりと決めて貰いたいのだ・・・この中で誰が一番好きなのかをな。」

スマホを胸元のポケットにしまったアイリスディーナが、とても真剣な表情でテオドールをじっ・・・と見つめた。
その真っ直ぐで澄んだ瞳に、思わずテオドールは引き込まれてしまう。
これは冗談でも何でもなく、本気なのだと・・・テオドールは瞬時に感じ取ったのだった。

7人の女子に同時に告白される・・・ギャルゲーでも有り得ない無茶苦茶なシチュエーションだが、それでも彼女たちが真剣である以上、テオドールも真摯な対応で向き合わなければ、彼女たちへの真剣な想いに対して失礼という物だろう。
例えそれによって、テオドールが選んだ者以外の6人が、傷付く事になったとしても。
生唾をゴクリと飲み込み、テオドールは緊張した面持ちでアイリスディーナたちを見つめる。

「皆、テオドールが誰を選んでも恨みっこ無しだからな。ではまずはキルケ。お前からだ。」
「ええ、分かったわ。アイリス先輩。」

促されたキルケがテオドールの首に両腕を回し、顔を赤らめながら抱き着いたのだった・・・。

3. 告白タイム

自分に抱き着いてきたキルケの身体の温もり、胸の感触、とてもいい匂い・・・そして眼前に迫るキルケの顔と甘い吐息に、思わずテオドールは赤面してしまう。
そしてキルケはとても潤んだ瞳で、じっ・・・とテオドールの顔を見据えていた。
こんな状況だと普段のリィズなら、全身から漆黒のオーラを放ちながら妨害してきそうな物なのだが、やはり今日この場で全員の恋の決着を付けると皆で決めた以上は、さすがに妨害行為はしてこないようだった。
とても真剣な表情で、リィズはテオドールとキルケのやり取りを見つめている。

「・・・テオドール君。私はあの日、あのファミレスで、身体を張ってカティアちゃんを守った貴方の

誠実な姿に一目惚れしたの。それはあの時ちゃんと話したわよね？」
「お、おう・・・。」
「貴方は他の男の人のようなクズ共とは違う・・・私の隣に並ぶべき男性は貴方しか考えられないわ。この間、両親が私にお見合いの話を持ちかけてきたんだけど、もう私は貴方以外の男の人を好きになる気になれないの。」
「お見合いってお前、まだ高校1年なのに、そんな・・・」

キルケもアイリスディーナと同様に名家の令嬢だと、テオドールはヨアヒムに聞かされていたのだが・・・だからと言ってまだ高校生なのに、お見合いなどさせる物なのだろうか。
と言うか誰を好きになろうが、そんな物は本人の自由だろうに。何故そんな事まで両親に束縛などされないといけないのか。
それ故にキルケにとってのテオドールに対しての想いは、誰よりも真剣なのだろう。

「このままでは私は、他のクズ共とお見合いをさせられてしまう・・・だけど私が心の底から愛しているのは貴方だけ・・・だからテオドール君。そうなる前に、私を貴方だけの物にして。」

とても潤んだ瞳で、キルケはテオドールをじっ・・・と見つめ・・・そして・・・

「・・・キスは1人3秒・・・短いけれど、まあ仕方ないわね。」
「キ、キルケ・・・。」
「この3秒に、私の貴方への想いの全てを込めるわ。」

ちゅっ。
キルケはテオドールに唇を重ねた。
そしてすぐに唇を離したキルケは、とても愛らしい笑顔でテオドールにウインクをして、テオドールから離れてアネットの隣に座ったのだった。

「よし次はアネット。お前だ。」
「了解～。ねえテオドール。私もアンタの事が好きだよ。」
「どあああああああああああああああああああああ（泣）！！」

物凄い勢いで、アネットがテオドールをベッドに押し倒した。
いきなりの出来事に戸惑うテオドール。そして身動きが出来ないテオドールの顔を、アネットがじっ・・・と笑顔で、しかし真剣な表情で見つめている。

「・・・本当ならこのままアンタを襲ってあげたい所なんだけど、アイリス先輩からキス以上の行為は禁止って言われてるから、これだけで勘弁しといてあげる。」
「襲うっておま・・・むぐぐ。」

ちゅっ。
アネットはテオドールに唇を重ねた。
そしてすぐに唇を離し、自らの唇をペロッと舐め、じっ・・・とテオドールの顔を見据えた。

「私、こう見えて意外と肉食系なんだよ？だから心だけじゃなくて、アンタの身体も存分に満足させられると思う。」
「ア、アネット・・・。」
「・・・あ、よく考えたら、これってキルケとの間接キスじゃん・・・レズ好きのアンタなら、こういうシ

チュエーションも燃えるでしょ～？」
「いやいやいやいやいや、いきなり何言ってんのお前（泣）！？」
「・・・この続きは、私と恋人同士になってから思う存分しようね？」

とても意地悪な笑顔を見せながら、アネットは自分が押し倒したテオドールを助け起こし、テオドールから離れたのだった。
隣に座るキルケと何やら小声で話し込んでいるようで、クスクスと笑い合っている。

「よし、次はカティアだな。」
「はい・・・テオドールさん。昨日も言いましたけど、私はテオドールさんの事が好きです。お兄ちゃんとしてではなく、1人の男性として。」

とても真剣な表情で、カティアはベッドに座るテオドールの首に両腕を回し、じっ・・・とテオドールを見つめた。
カティアの身体の温もり、胸の感触、そしてとてもいい匂い・・・先程のキルケやアネットに続いてこんな物を立て続けに味わってしまうと、なんかもうテオドールの理性が吹き飛んでしまいそうだ。
と言うか女子にモテない他の男たちにこんな光景を見られたら、本当に心の底から恨まれて殺されそうな気がする・・・。

「・・・わ、私、見ての通り幼児体型ですし、胸も小さいですし、だからさっきのキルケさんやアネットさんに比べたら、テオドールさんにとっては物足りないかもしれないですけど・・・」
「いやいやいやいやいやカティア、お前まで何言ってんの！？」
「ですがこんな私でも、テオドールさんへの想いは本物なんです！！」

とても真剣な表情のカティアの瞳に、思わずテオドールは引きこまれてしまう。

「私、テオドールさんの心も身体も思う存分満足させられるように、その・・・これから色々と勉強しますからねっ！！」
「お前はこれから色々と何を勉強するつもりなんだ（汗）！？」
「テオドールさん、好きです・・・愛しています！！」

ちゅっ。
カティアはテオドールと唇を重ねた。
そしてすぐにテオドールから唇を離し、目に涙を浮かべながらその場を離れていく。
物凄くとんでもない事を口走ってはいたが、それだけテオドールへの想いは本物なのだという事なのだろう。
今にも泣きそうなカティアの顔を、キルケがとても穏やかな笑顔で、自らの豊満な胸に埋めたのだった。
とても気持ち良さそうに、カティアはキルケの身体に身を任せている。

「さて、次はファム。お前だ。」
「・・・テオドール君。私は最初は貴方の事を、可愛い弟のように思っていたんだけど・・・いつの間にか貴方の事を本気で好きになってしまったみたい。」

ちゅっ。
ファムはテオドールの首に両腕を回し、そっ・・・とテオドールと唇を重ねた。
だが、その瞬間。

「待てファム！！それはルール違反だ！！」

ピッピーッ！！
ホイッスルを慣らしたアイリスディーナが、ファムにレッドカードを提示した。
そして抱き着いているテオドールから強制的に引き離されてしまう。
あまりの突然の出来事に、テオドールも戸惑いを隠せない。

「そんな、いきなり何を言い出すのアイリスちゃん！？」
「お前どさくさに紛れて、テオドールのちんちんを思い切り触っただろう！？」
「・・・な、そ、そんなのは言いがかりよ！？証拠はあるの！？証拠は！？」

アイリスディーナはテオドールのパジャマの股間の辺りから、ファムの指紋を採取したのだった。
決定的な証拠を突きつけられたファムは、驚愕の表情でその場に崩れ落ちてしまう。

「一瞬の出来事だったから、他の者は気付かなかったようだが・・・私の目はごまかせんぞ。」
「・・・そ・・・そんな・・・！！」
「キス以上の行為は禁止、破れば即時退場処分・・・そう決めていたはずだがな？ファム。」
「ああん、ちょっと待って、テオドール君、あああああああん！！」

アイリスディーナとリィズに引っ張られながら、ファムは部屋の外に追い出されてしまったのだった・・・。

「テオドール君、私が貴方の事を思う存分満足させてあげるわ！！だからこの続きは私と恋人同士になってから、思う存分しましょうねぇ～～～～！！」
「まあ、あの馬鹿は放っておいて・・・次はベアトリクス。お前だ。」

ファムも馬鹿な子ね・・・要はバレなければどうという事は無いのよ。
そう言いたげな表情で、ベアトリクスはテオドールと唇を重ねたのだが。

「待てベアトリクス！！それもルール違反だ！！」

ピッピーッ！！
ホイッスルを鳴らしたアイリスディーナが、ベアトリクスにレッドカードを提示した。
そして抱き着いているテオドールから、強制的に引き離されてしまう。

「な、いきなり何の真似よアイリス！？」
「お前今、テオドールの口の中に舌を入れただろう？」
「・・・な、何を、そんなのは言いがかりよ！？証拠はあるの！？証拠は！？」

アイリスディーナはテオドールの舌から、ベアトリクスのDNAを採取したのだった。
決定的な証拠を突きつけられたベアトリクスは、驚愕の表情でその場に崩れ落ちてしまう。

「馬鹿な！？何でバレたのよ！？ほんの一瞬しか入れていないのに！？」
「テオドールの表情が一瞬だが強張っていたからな。これはキルケたちがキスをした時には見られなかった。それが私が異変に気付いた理由だ。」
「テオドール貴方、女性に対して免疫が無さ過ぎよ！！」

いや、そんな事を俺に言われても・・・テオドールはそう言いたげな表情で、涙目になりながらベアトリクスを見つめている。

「キスの時に舌を入れるのは禁止・・・そう決めていたはずだよなあ？ベアトリクス。」
「ああん、ちょっと待って、テオドールうううううううううう！！」
「と言うか、お前には兄上がいるだろうが。」
「ユルゲンは私の夫よ！！テオドールは私の愛人にするのよおおおおおおおお！！」
「・・・お前は一体何を言っているんだ・・・？」

ずるずるとベアトリクスは、アイリスディーナとリィズに身体を引っ張られ、部屋の外へと放り出されてしまったのだった・・・。

4. 俺が好きなのは・・・！！

キルケ、アネット、カティア、ファム、ベアトリクスと、立て続けに告白されてキスをされたテオドール。
５人の唇の柔らかくて優しい感触が、５人のテオドールへの想いが、テオドールの唇に・・・そして心に深く刻まれ、いつまでもテオドールをキスの余韻から離さない。
戸惑いを隠せないテオドールだったが、それでもまだまだこれで終わりではないのだ。

と言うか彼女たちは、こんな朝っぱらから一体何をやっているのだろうか・・・。

「さて、これで残るは私とリィズの２人だけとなったわけだが・・・。」
「ええ、次は私がお兄ちゃんに告白する番よ。」

そう言い放ったリィズは、胸元のポケットから一枚の紙切れを取り出した。
それはリィズが以前、テオドールがバイトをすると言い出した際に書かせた、高校卒業後もずっとこの家で暮らすという誓約書（第2話参照）・・・だったのだが・・・。

「・・・ねえ、お兄ちゃん。これは確かにお兄ちゃんが直筆でサインした誓約書だよね？」
「あ、ああ・・・て言うかお前、そんな物を何で今更・・・。」

リィズは誓約書の最後の方に書かれた文章を、テオドールに指差したのだった。

「・・・じゃあこれに関しても、お兄ちゃんは同意したって事でいいんだよね？」
「・・・は？・・・はあああああああああああああああああ！？」

『私、テオドール・エーベルバッハは、高校卒業後にリィズ・ホーエンシュタインと結婚する事を誓います。』

誓約書には思い切り、そう書かれていた・・・。
全く身に覚えの無い文章に、テオドールは思わず動転してしまう。

「待て待て待て待て待て！！こんな事書いて無かったはずだろ！？お前これ絶対俺が署名した後に付け足しただろ（泣）！？」

「本当にそう？確信が持てる？お兄ちゃんが見落としてただけなんじゃないの？お兄ちゃんったら慌てん坊さんなんだから、契約内容を良く確認せずにサインしたんじゃないの？」
「・・・ううっ・・・それは・・・」

そう凄まれると、何だか本当に確信が持てなくなってしまったテオドールであった・・・。
いや、結婚云々の文章は本当に書いて無かったはずなのだが・・・リィズに凄まれると何故か自分に見落としがあったのではないかと本当に思ってしまう。
テオドールの首に両腕を回し、物凄い表情で迫るリィズ。
その凄まじい迫力に、思わずテオドールはたじろいてしまう。

と言うか、最早告白をすっ飛ばして恐喝になっていた・・・。

「ねえ、お兄ちゃん。もう諦めて。諦めて私の恋人になって。私、お兄ちゃんの為に、これまでずっと頑張ってきたんだよ？」

リィズはとても潤んだ瞳で、戸惑うテオドールをじっ・・・と見つめた。

「・・・私に告白してくる男共だって何人も振ってきた！！」
「お前俺が知らない間にそんな事されてたの（汗）！？」
「・・・不純異性交遊は駄目だとか言う先生たちを垂らし込ませる為に、この間の数学のテストで100点を取った！！」
「お前本当に凄ぇな（汗）！！」
「・・・アスクマンを調教して犬にした！！」
「お前が犬にしたのかよ（汗）！？」

家の外では相変わらずアスクマンが亀甲縛りされた状態で、必死にテオドールの名前を叫びながらぎゃあぎゃあ騒いでいたのだが。

「うるさい！！黙れポチ！！」
「わんわんわん！！・・・くーんくーんくーん・・・。」

リィズの一喝で、情けない表情で黙り込んでしまったのだった・・・。

「・・・ねえ、私と一緒に来て、お兄ちゃん・・・私はただ、お兄ちゃんと一緒にいたいだけ・・・。」
「リ、リィズ・・・んんっ・・・。」

目に涙を浮かべながら、リィズはテオドールと唇を重ねた。
そしてすぐに唇を離し、テオドールの事をじっ・・・と見つめながら、アイリスディーナの隣に座ったのだが・・・。

「さて、最後に残ったのはこの私だな。」

立ち上がったアイリスディーナが、テオドールの首に両腕を回す。
そして。

「・・・お前は私の未来の夫だ。お前は私の未来の夫だ。」

テオドールの耳元でうわ言のように、物凄い笑顔でそう呟き続けたのだった。
いきなりのアイリスディーナの行動に、リィズたちは仰天した表情になる。

「お前は私の未来の夫だ。お前は私の未来の夫だ。お前は私の未来の夫だ。お前は私の未来の夫だ。お前は私の未来の夫だ。お前は私の未来の夫だ。お前は私の未来の夫だ。お前は私の未来の夫だ。お前は私の未来の夫だ。」
「・・・あ・・・あへ・・・あへへ・・・」
「お前は私の未来の夫だ。お前は私の未来の夫だ。お前は私の未来の夫だ。お前は私の未来の夫だ。お前は私の未来の夫だ。お前は私の未来の夫だ。お前は私の未来の夫だ。お前は私の未来の夫だ。お前は私の未来の夫だ。はい復唱。」
「・・・お、夫・・・俺はアイリスの・・・夫・・・俺はアイリスの夫・・・」
「そうだ。お前は私の未来の夫だ。」

何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も同じ事を耳元で呟かれたテオドールは、だんだん頭の中がボーッとなってきた。
そして口からヨダレを垂らして目をグルグルさせながら、テオドールは完全にアイリスディーナにされるがままになってしまっている。
アイリスディーナの身体の温もり、柔らかい胸の感触、そしてとてもいい匂いが、さらにテオドールの理性を失わせていく。

「・・・ふ～っ。」
「はあ・・・ん・・・っ。」

アイリスディーナがテオドールの耳元に甘い吐息を吹きかけると、テオドールは身体をビクンビクンさせたのだった・・・。

「そしてリィズはお前の妹だ。リィズはお前の妹だ。リィズはお前の妹だ。リィズはお前の妹だ。リィズはお前の妹だ。リィズはお前の妹だ。リィズはお前の妹だ。リィズはお前の妹だ。リィズはお前の妹だ。リィズはお前の妹だ。はい復唱。」
「・・・い、妹・・・リィズは俺の・・・妹・・・」
「そうだ。断じてお前の恋人などではない。妹だ。」

勝ち誇った笑顔でテオドールの耳元で呟き続けるアイリスディーナの姿に、リィズが全身から漆黒のオーラを放ちながら立ち上がったのだった。

「ちょっとアイリス！！お兄ちゃんに一体何やってんのよ！？」
「リィズさん駄目です～！！告白中は一切の手出し口出しはしないって、皆で約束したじゃないですか～！！」
「いや告白というか、最早告白ですらないわあああああああああああああああっ（激怒）！！」

アイリスディーナに飛びかかろうとするリィズを、必死に背後から押さえ込むカティア。
しまった、その手があったのか・・・！！キルケもアネットも、そして部屋の外に追い出されたベアトリクスもファムも、とても悔しそうな表情でその様子を見つめている。
どれだけ自分たちがテオドールへの愛と想いを込めた告白をしようとも、肝心のテオドールの脳内に強い暗示を刷り込まれてしまっては、何の意味も無いのだ。

アイリスディーナは今日の朝に集合した際、皆との打ち合わせの最中において、自分が一番最

後にテオドールに愛の告白をすると率先して名乗り出たのだが、初めからこれが目的だったのだ。
　テオドールへの暗示が解けてしまう前に、確実にテオドールに自分が好きだと言わせる為に。
　言葉は言霊・・・実際にテオドールに「アイリスが好きだ」と口にさせる事さえ出来てしまえば、それはとても重い意味を持つ物になるのだから。

　そうこうしている内に、制限時間の1分ギリギリまでテオドールの耳元で呟き続けたアイリスディーナは、そっ・・・とテオドールと唇を重ねたのだった。
　そしてすぐにテオドールから離れて、物凄い笑顔でリィズの隣に座る。

「さて、これで私のテオドールへの洗脳・・・じゃなかった、愛の告白が終わったわけだが。」
「洗脳って言ったよね！？今アンタお兄ちゃんへの洗脳って言ったよね（激怒）！？」
「ではテオドール。今この場で迅速にすぐに決めてくれ。私たちの誰を恋人にするのかをな。」

　目をグルグルさせながら、混濁とした意識の中で、テオドールの脳内で

『俺はアイリスの未来の夫』
『アイリスは俺の未来の妻』
『リィズは俺の妹』

　という言葉が、何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も繰り返し再生され続けている。
　アイリスディーナはボイスレコーダーをテオドールに向けながら、とても勝ち誇った笑顔でテオドールを見つめている。
　この恋の争奪戦の勝者は自分だと・・・そう信じて疑わないとばかりに。

「・・・お、俺が好きなのは・・・」
「俺が好きなのは・・・？誰なのだ？テオドール。ん～～～～～～？」

　俺はアイリスの未来の夫。アイリスは俺の未来の妻。リィズは俺の妹。
　俺はアイリスの未来の夫。アイリスは俺の未来の妻。リィズは俺の妹。
　俺はアイリスの未来の夫。アイリスは俺の未来の妻。リィズは俺の妹。
　俺はアイリスの未来の夫。アイリスは俺の未来の妻。リィズは俺の妹。
　俺は・・・

「・・・ア・・・アイ・・・」
（・・・お兄ちゃん・・・。）
「・・・！？」

　ふと、混濁した意識の中で、テオドールの頭の中にリィズの可愛らしい笑顔が浮かんだ。
　ホーエンシュタイン家に引き取られた幼少時から、両親を事故で失い寂しい想いをしてきた自分の傍にずっといてくれて、ずっと自分の事を慕ってくれていた、義理の妹の姿が。
　とても不安そうな表情で自分を見つめるリィズの姿を見たテオドールは、アイリスディーナの洗脳を完全に打ち破ったのだった。
　そうだ・・・俺が好きなのは・・・俺がこれまでずっと好きだったのは・・・！！

「・・・違う・・・！！」
「な・・・！？」
「俺が好きなのは！！」

驚愕の表情を見せるアイリスディーナを無視し、テオドールはリィズの身体をぎゅっと抱き締め、はっきりと告げたのだった。

「俺が好きなのはリィズ！！お前だ！！」
「・・・っ！？」

リィズは一瞬、テオドールが何を言っているのか理解出来なかった。
だが自分を抱き締めるテオドールの身体の温もり、そして力強い腕の感触が、すぐにテオドールの言葉の意味を理解させた。
とても真剣な表情で、テオドールはリィズの身体をぎゅっと抱き締め続けている。

「俺はずっと昔から、お前の事が好きだった・・・だけどお前は義理とは言え俺の妹だから・・・お前を好きになるのはまずいんじゃないかって、ずっとお前への気持ちを押し込めていたんだ。」
「・・・お兄ちゃん・・・。」
「お前が俺の恋人になる事で、お前が周囲から白い目で見られるんじゃないかって・・・お前が学校でいじめられるんじゃないかって、ずっとそう思ってた・・・だけど違うだろ・・・そうじゃないだろ・・・！！」

リィズを酷い目に遭わせたくないから、自分が身を引かなければ・・・そんな物は言い訳に過ぎないのだ。
テオドールはとても真剣な瞳で、涙目になったリィズを見つめる。
そして今にも泣きそうなリィズの頬を、そっ・・・と右手で撫でてあげたのだった。
今にも不安で押し潰されそうなリィズを、安心させる為に。

「もしお前に酷い目に遭わせる奴らがいるのなら・・・俺がお前を守る！！」
「お兄ちゃん・・・！！」
「だって俺は・・・俺はお前の・・・お兄ちゃんなんだから！！」
「お兄ちゃああああああああああああああああああああん！！」

互いの唇を貪り合い、互いの身体を抱き締め合うテオドールとリィズ。
キスは1人3秒まで・・・だが互いに兄妹の縛りを解き放ち、恋人同士となった今となっては、そのルールは最早何の意味も成していなかった。
長い長いキスの後、互いに潤んだ瞳で、互いを見つめ合うテオドールとリィズ。
その様子をアイリスディーナが、信じられないといった表情で見つめていた。

「馬鹿な・・・私がお前に施した洗脳を、こうもあっさりと打ち破るとは・・・！！」
「ああそうさ、俺は危うくお前の言葉に飲み込まれる寸前だった・・・だが俺のリィズへの想いが、リィズの俺への想いが、俺を正気に戻してくれたんだ・・・！！」
「くっ・・・それ程までの強い絆だとでも言うのか・・・！！」

２人の想いの強さをこうもはっきりと見せ付けられてしまったのでは、さすがのアイリスディーナも何も言い返す事は出来なかった。
誰がテオドールと恋人同士になっても恨みっこ無し・・・それを言い出したのは他でもない、アイリスディーナ自身なのだから。
いや、アイリスディーナだけではない・・・カティアもアネットもキルケもファムもベアトリクスも。
誰もがテオドールとリィズの事を、複雑な表情で見つめていた。

「お兄ちゃん、大好き・・・世界中の誰よりも、お兄ちゃんの事が大好き！！」

あおーーーーーーーーーーん（泣）！！
家の外でアスクマンが、何やら変な叫び声を上げていたのだった・・・。

5. 何はともあれ日はまた昇る。

かくして、テオドールとリィズは無事に恋人同士となった。
その事をテオドールとリィズは朝食を食べながら、すぐに両親に報告した。
突然の出来事にさすがに驚きを隠せなかった両親だったのだが、それでも2人なら大歓迎だと温かく祝福されたのだった。

ただし少なくとも2人が高校を卒業し、テオドールが就職するまでは、絶対に一線を超えない事・・・それだけは両親から強く念を押され、テオドールもリィズも快く了承したのだった。
まだ高校生の内にリィズを妊娠させるような事態になってしまったら、それこそテオドールもリィズも、周囲から侮蔑の目で見られてしまいかねない・・・それはテオドールもリィズも重々承知しているのだから。

そして噂が流れるのは本当に早い物で、2人が恋人同士になったという事実は、すぐに学校中に伝わる羽目になってしまった。
その事でリィズがいじめられるんじゃないかと正直不安だったテオドールだったのだが、意外にもそんな事は無かったようで、リィズはクラスメイトたちからすんなりと祝福されたのだった。
またバイト先のファミレスでも、テオドールとリィズはすぐにユルゲンに報告し・・・ユルゲンは正直残念だ、君には妹と添い遂げて欲しかったと苦笑いしながらも、それでも妹の分まで2人で幸せになってくれと祝福されたのだった。

まさに名実共に、テオドールとリィズは恋人同士となった・・・はずなのだが・・・。

「・・・な・・・何で・・・！？」

その翌日の朝・・・テオドールを起こしに来たリィズが目撃したのは・・・これまでと同様にテオドールに添い寝をするアイリスディーナだった。
アイリスディーナは勝ち誇った笑顔で、威風堂々とリィズを見据えている。

「やあ、お早うリィズ。」
「お早うじゃないわよ！！何でアンタは未だにお兄ちゃんに添い寝してるのよおっ！？」

全身から漆黒のオーラを放ちながら、リィズは無理矢理アイリスディーナを引き離そうとする。
だがアイリスディーナもまた全身から白銀のオーラを放ち、必死にテオドールにしがみついてリィズに抵抗しようとする。

「あのねえアイリス、お兄ちゃんは私と恋人同士になったのよ！？」
「ああそうだ。誠に遺憾ながら、テオドールが将来の妻として選んだのは私ではなくお前だ。」
「だったら何でアンタはお兄ちゃんにちょっかいを出してくるのよぉっ！？」

リィズの質問に、アイリスディーナは威風堂々と、はっきりと宣言したのだった。

「私はテオドールの妻になるのは諦めた。だから私はテオドールの愛人になる事にしたのだ。」
「・・・あ・・・い・・・じ・・・ん・・・！？愛人～～～～～～～～～～（激怒）！？」
「だからお前はお前で、勝手にテオドールと仲睦ましくするがいい。私は私で勝手にテオドールと愛を深めさせて貰うからな。」
「はああああああああああああああああああああああああああああ（激怒）！？」

何だよ、こんな朝早くから、うるさいなぁ・・・耳元でリィズとアイリスディーナに騒がれて目を覚ましたテオドールだったのだが・・・目の前で何が起こっているのか一瞬理解出来なかった。
だが数秒後・・・自分の顔に押し付けられているアイリスディーナの豊満な胸の感触、そして物凄い形相で自分を睨みつけるリィズの姿に、すぐに今の状況を理解したのだった。

「・・・あっれええええええええええええええええええええええ（泣）！？」
「やあ、お早う我が愛人よ。」
「あ・・・い・・・じ・・・ん・・・！？愛人～～～～～～～～～～～～～（泣）！？」
「そういう訳だからテオドール。これからもよろしく頼むぞ。ははははは。」
「ははははは、じゃねえだろおおおおおおおおおおおおおおお（泣）！！」

アイリスディーナを振りほどいて慌てて起き上がったテオドールだったのだが、そこへテオドールの携帯電話にカティアからの着信が届いたのだった。

「・・・もしもし、こんな朝早くから一体どうしたんだよ？カティア。」
『テオドールさん、すぐにテレビを付けて下さい！！』
「テレビを付けろってお前、一体何を・・・」
『いいから早く！！大変な事になってるんですよ！！』
「・・・大変な事・・・？お前一体何を・・・。」

怪訝に思いながらテオドールが部屋のテレビを付けると・・・そこに映されていたのはドイツの首相の緊急記者会見の生放送だった。
そして何故か青ざめた表情の首相の隣には、何故か妖艶な笑みを浮かべるベアトリクスの姿が。
テレビに表示されたテロップに書かれていた内容・・・それは・・・。

『首相、一夫多妻制度の緊急成立を発表。』

「い・・・いっぷ・・・たさい・・・！？きんきゅう・・・！？は・・・あ・・・え・・・！？」

唖然とした表情のテオドールを尻目に、ドイツの首相が何故か怯えた表情で記者会見に望んでいたのだった・・・。

『・・・そ、そういう訳でありまして、昨日の夜に緊急で行った閣僚会議の結果・・・我ら統一ドイツにおいて、本日付けで一夫多妻制度を成立させる事と相成りました・・・。』
『首相、今回の一夫多妻制度という、極めて異例となる法案を成立させた事について、首相の真意をお聞かせ下さい！！』
『い、一夫多妻自体は、世界中で見れば特に異例という訳ではありません・・・皆さん意外にお思いでしょうが、じ、実は日本でも江戸時代までは側室制度という物がありまして・・・』

と言うかこの首相は、一体何をそんなに怯えているのだろう。
と言うかベアトリクス先輩は、こんな所で一体何をやっているのだろう。
と言うか一夫多妻制度って一体何。

色々とツッコミを入れたくなる衝動を必死に抑え、テオドールはテレビの緊急特番をじっ・・・と見つめていたのだった。
アイリスディーナもリィズも口をポカーンとさせながら、テオドールの奪い合いを一旦止めて、テレビの画面を眺めていたのだが・・・。

『今回の一夫多妻制度の導入によって、1人の男性に複数の女性が集中し、結果として結婚したくても出来ない若者が増えるのではないかと私は危惧しております。その点についてはどうお考えなのでしょうか？』
『そ、それに関しましては・・・』

なんかベアトリクスが妖艶な笑顔で、首相の耳元でブツブツ呟いていた。

『ほ、本来恋愛という物は、もっと自由であるべきであり・・・』
『私は首相に聞いているのです！！と言うか彼女は一体何なのですか！？』
『い、一夫多妻制度以外の質問に関しては、申し訳ありませんがノーコメントで・・・。』
『では一夫多妻制度の質問に戻らせて頂きますが、首相は自由な恋愛を掲げてはいますが、やはり1人の男性が複数の女性と同時に結婚するというのは、やはり歪な形だとしか・・・！！』

なんかもう、何からツッコミを入れたらいいのか、全然意味が分からない。
唖然とした表情のテオドールに、カティアがさらにとんでもない事を告げたのだった。

『そういう訳なので、私は今からテオドールさんの愛人になります！！』
「・・・はあああああああああああああああああああああ！？」
『正妻の座はリィズさんに譲りますが、それでも私は愛人としてテオドールさんの傍にいますから！！それなら文句無いですよね！？』
「おまおまおまおまおま、お前いきなり何言って・・・！？」
『いやだって、たった今法律で認められたじゃないですか！！そういう訳なんで今からテオドールさんの家に挨拶に伺いますねっ！！それではっ！！』
「ちょ・・・！？」

ツー、ツー、ツー・・・。
ピロリロリン、ピロリロリン♪
カティアからの通話が一方的に切れた後、さらにキルケからの着信が鳴り響いた。

「も・・・もしもし・・・」
『・・・あ、やっと繋がった。テオドール君、テレビ見た？』
「・・・ま、まさか・・・！！」
『そのまさかよ。私、テオドール君の愛人になる事にしたから。』
「お前もかよおおおおおおおおおおおお（泣）！？」
『今から貴方の家に挨拶に行かせて貰うわ。それじゃあね。』

ツー、ツー、ツー・・・。
ピロリロリン、ピロリロリン♪

キルケからの通話が一方的に切れた後、さらにアネットからの着信が鳴り響いた。

「・・・お前も俺の愛人になるって言うのかよ（泣）！？」
『うわっ、びっくりした！！いきなり大声出さないでよ！！』
「わ、悪い・・・じゃなくて（泣）！！」
『まあ理解してるなら話は早いよ。そういう訳だから、今からアンタの家まで挨拶に行くわ。それじゃ。』

ツー、ツー、ツー・・・。
ガチャッ。
アネットからの着信が一方的に切れた後、さらにファムがいきなり部屋に入ってきた。

「うわあああああああああ！！うわあああああああああああああああああああああ（泣）！！」
「テオドール君～、私、貴方の愛人になる事にしたわ～！！」
「アンタは一体何なんだあああああああああああああああああ（泣）！？」

ファムに抱き締められたテオドールに、さらにテレビを通してベアトリクスが呼びかけてきた。

『・・・そういう訳だからテオドール・・・私は貴方の愛人になる事にしたわ。』
「ひいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいい（泣）！！」
『これで後腐れなく貴方の傍にいられるという訳ね・・・ふふふ・・・あはははははは！！』

なんかもう何が何だか、全然意味が分からないテオドール。
そんなテオドールを逃がすまいと、アイリスディーナもファムと競うようにテオドールを抱き締めた。
２人の女子に左右から抱き締められて、身動きが出来ないテオドール。

「成る程、これで何も気にする事無く、堂々とお前の愛人になれるという訳だな。」
「ぎゃあああああああああああああああああああああああ（泣）！！」
「・・・お～に～い～ちゃ～あ～ん（激怒）？」
「リィズーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー（泣）！！」

リィズが放った漆黒のオーラが、部屋中を激しく暴れ回ったのだった・・・。

「これじゃあ今までと何も変わらないじゃないのよおおおおおおおおおっ！！お兄ちゃんの馬鹿ああああああああああああああっ（激怒）！！」

あおーーーーーーーーーーん（泣）！！
家の外でアスクマンの叫びが聞こえたような気がしたのだった・・・。